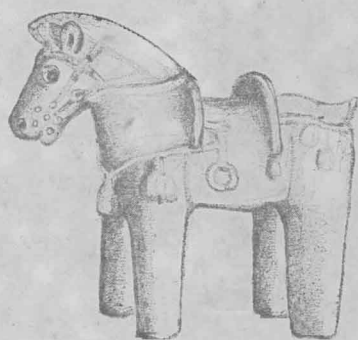


卷之三
詩經
卷之三

近世文學評論

暉 峻 康 隆 著



育 英 書 院 版

近世文學評論

(出文協承認お80175)



昭和十七年九月二十五日 初版印刷
昭和十七年十月一日 初版發行(二〇〇〇部)

●定價三圓

著者 暉峻康隆

發行者 東京市神田區駿河臺三ノ一 目黒四郎

印刷者 東京市神田區錦町三ノ一一 白井赫太郎

印刷所 東京市神田區錦町三ノ一一 精興社 (東京四二)

發行所 東京市神田區駿河臺三ノ一 合資育英書院

振替東京七四二番
會員登錄番號 一〇二五〇四

配給元 東京神田駿河臺町二ノ九 日本出版配給株式會社

まへがき

去年の春から今年の夏にかけて書いたものの中から、なるたけ評論的なものをこれだけ擇んでまとめてみた。ただ最後にをさめた近世寫實小説の展開だけは、全體をしめくくる意味で、大學での講義の一部をできるだけこれも評論風にまとめたものである。加筆訂正はもとより、原形をとどめないものが多いのは、その時々々の條件にしばられて言ひ足りなかつた點や考への足りなかつた點を補つたため、これは自分のためでもあり、また讀んでいただく方に對するエチケットでもあると信ずる。

近世文學を專攻する學究の私が、評論的な文章を書きまた擇んだのは、すこしでも自分の専門的な知識が現實の用に立つことを念ずる心からである。専門的な研究といふものは、そのままでさし迫つた現實の用に立ちにくいものである。かつて國家の現實的要求とは無關係に研究に没頭することが學究の學

究らしき所以と考へられた時代があつたが、今日それぞれの職能に應じて國家のお役に立ちたいと希はぬ日本人はおそらくないはずである。學究は學究である前に日本人なのである以上、ささやかな學統や個人的な嗜好によつて擇んだテーマに没頭してゐる時ではない。對象は各人の適應性によつてきまるとしても、テーマは現實の國家的要求によつて決定さるべきである。さうすることによつてのみ學問が生きてくるのであり、古典が創造に參與し得るのである。それ自身の力をもつて現代に生きてゐるのが眞の古典であるとも言はれてゐるが、しかし時代は古典のさういふ力を全面的に無條件で要求するとは限らない。私はむしろ現代の要求に應じて古典を生かすものでありたい。そのために古典の生態をあらゆる角度からきはめておくことが必要であることはいふまでもないことである。

いまこそ我々學究は、多年貯へて來た専門的な知識をもつて、國家の現實的要求の前に身を挺すべき秋である。さう思つて見廻せば、我々の前になすべき仕事はあまりにも多いが、さし當つて私にできることは、新しい文學の創造に缺く

べからざる自國の文學傳統に對する信賴と確信とについて語ることである。
傳統に對する正しい理解、更にすすんでは確乎たる信念を抱くに至らない限り、
新たな創造は開始さるべくもない。

昭和十七年七月中旬

目次

まへがき 一

文學の母胎

新しい國學	三
時代と作家	一一
歴史小説について	一九
秋の季感	二四
光悦の矜恃	三三
元祿のモラル	四七
封建インテリの悲劇性	六四

リアリズムの傳統	八〇
上方文學と江戸文學	九六
近世小説における俗語の役割	一〇三

西鶴について

西鶴の世界觀	一一五
西鶴と後續文學	一三四
西鶴と芭蕉	一四九
西鶴の女性觀	一六三
西鶴隨想	一八二
「西鶴俗つれづれ」について	一九五
西鶴晩年の詩精神	二一五

近世寫實小説の展開

第一章	序	説		二二九
-----	---	---	-------	-----

第二章	前期寫實小説		二四二
-----	--------	-------	-----

第三章	後期寫實小説		二五九
-----	--------	-------	-----

I
文學の母胎

新しい國學

1

國學についての希望的言説がジャーナリズムの上にあらははじめてから、まだ半年とたたない。今年の三月に發行された久松博士の「國學」が口火となつたもののやうである。

結果論かも知れないが、博士の著書がジャーナリストに國學といふテーマを與へたについてはそこにそれだけの條件がそなはつてゐた。博士がその序において、「今日日本の歴史や文化に對する自覺が力強く起り、皇國精神に立脚する學問の建設の要望せられるに至つたことはまことに當然のことと喜びに堪へないのであるが、自分としてはこの一筋につながつて今日にまで至つて居ることに對して感慨の深いものがある」といつてをられるやうに、人と時を得たことが第一に擧げられるが、なほその上に一般知識人への浸透力をそなへたその圓熟せる表現と國學復活への熱

意を指摘すべきであらう。學者が學問を見せるために餘りにも専門化した論説の多すぎる現下のわが國において、その權威を失墜することなく、一般への浸透力と行的性格を持つた論説はきほめて必要であらうと信ずる。時局下における學問の役割もまたそこにあるからである。

きはめて正常な好ましい學問とジャーナリズムの結合を私はここに見るのであるが、しかしテーマがひとたびジャーナリストの手に渡ると、それはとたんに建設的・積極的な相貌を帯びてくる。單なる傳統的な國學の解説や復活論から一步進んで、國學の更進、時代に即した新國學の誕生といふやうなテーマが掲げられる。ジャーナリズムの本質としてさうあるべきであり、事實また皇神の道を明らかにするといふその大目的において變るところのあらう筈はないにもかかはらず、國學がこの新しい時代の指導理念としてより強力であるためには、封建時代といふ特殊な環境の中で成立した國學の態度・方法までを、そのまま無批判に復活せしめてよからうはずはないのである。

従つて「新しい國學」について語らうとするものは、何よりもまづ傳統的國學に對する批判から出發しなければならぬ。

その源流にさかのばれば、久松博士の御説の如く、元祿の戸田茂睡ならびに契沖にまで至るべきであらうが、私は國學の封建時代における實際的・社會的役割を重視して、だいたい次の四段階において把握してゐる。

第一に國學は眞淵において理想主義的性格を與へられ、第二に宜長によつて學的性格を確立し第三に篤胤に至つて行的性格を帶び、最後に明治維新の推進力となつて所期の目的を一應達成したと考へるのである。當然、王政復古の大業が成就して後の國學の目的は、自覺され統一された國家意識の宣揚にあり、具體的には第二段階において確立された學的方法（國語學・文獻學・解釋學）を契機として新興の國文學と結び、今日に及んだのである。

國學の歴史をかく見る時に、まづ問題にすべきことは、その新たなる國文學との關係である。國學が意識的に國文學の主體と考へられるやうになつたのは、もちろん明治以降のことであるがそれは明かに學的ジャンルを無視したところから發生した誤謬であつた。

國學の目的は、封建時代といへども、明治以降といへども、わが國獨自の精神文化を研究し、

知的に再組織して一般文化の支柱たらしめんとするにあるのであるから、古典文學の研究は手段でこそあれ目的ではあり得ないのである。事實また、狹義に規定された國學の對象は、古事記、日本書紀、古語拾遺、舊事本紀、風土記、新撰姓氏錄、延喜式のいはゆる七部神典であり、萬葉集や源氏物語の研究は、それ等の國典に盛られた正義を把握するための段階に過ぎないのである。しかも彼等の熱意は、みづから創作し、作文することによつて上代精神の體現をはかるといふ創造的な手段をとるとともに、一方においては、國語學、文獻學、解釋學等の基礎學を確立するに至つた。かくして眞淵・宣長における國學は、一見國文學的外貌を呈するに至つたのであるが、しかし彼等がけつして國學すなはち國文學といふ曖昧な態度に墮さなかつたことは、中世武家執權以後の文藝文化を對象として取上げなかつたといふ理想主義的見識と氣慨によつて思ひ知るべきであり、更にすすんで實踐的な篤胤に至つては、外貌の上からいつても國文學的雰圍氣を止揚して、醇乎たる國學の精神と態度を堅持してゐるのである。

すなはち國學にあつては、古文獻によつて純粹なる日本精神の在り方を把握し顯揚することが目的なのであるから、七部神典がさうであるやうに、對象が藝術的に形象化されてゐる必要は毫もないのである。しかるに國文學の對象は、それが意識的なものであらうとなからうと、藝術的

に形象化された、いはゆる古典文學であることが第一の條件であり、しかも古典文學における美と眞實の諸相とそれの發展の法則（文學史）の究明を本來の目的とする國文學における對象は、純粹を求めて武家執權以後の文化を除外する國學と違ひ、文學發生以來現代に至るあらゆる種類の古典文學であらねばならない。基礎的方法と、手段としての對象の一致によつて、明治以後、かかる根本的な相違を無視し、國學と國文學が結婚せしめられた結果、國學も國文學も互にその本來の使命を牽制しあひ、どつちつかすの状態を現出したのであつた。すなはち國文學者が同時に國學者であらうとした結果、眞淵や宣長においては第二義的な手段にすぎなかつた萬葉や源氏の各個的研究が、いつの間にか第一義となつてしまひ、さればといつて中世以降の古典文學は、依然として眞淵・宣長の見識に従つて考へて見ようとしなはいといふ、國學としても國文學としても不徹底なものとなつてしまつたのである。もちろん明治中期以後、漸次國文學における史的研究の意義に目覺め、研究領域も近世にまで擴大されたが、それとてもいはゆる列傳體に過ぎず、さらにその後文藝學の提唱があつたにもかかはらず、その不徹底さは今日にまで及んでゐるのである。

いふまでもなく、國文學も單に古典文學の實相を提示するにとどまらず、評價しなければなら

ない以上、國學的精神の上に立たねばならぬのであるが、しかしそれはひとり國文學に限らない。わが國におけるすべての學問がさうあらねばならぬのであるから、すくなくとも今後國學は第二義的な方法や對象の一致にもとづく國文學との特殊關係を清算し、國文學をもふくめてすべての學藝文化の根幹たるべき精神科學としての自覺と權威を確保することが望ましい。もちろん實際問題としては、ゲーテが科學者であると同時に藝術家であつたやうに、國學者が同時に國文學者であり史學者であることをさまたげないどころか、それぞれの學問の意義と目的を自覺して行動する限り、知識の廣さが豫期以上の成果をもたらし場合もあり得るのである。

3

新しい國學は國文學との因果關係を清算し、日本文化一般の根幹たるべき精神科學であらねばならぬと考へる以上、その學的性格もさういふ在り方に適應したものであらねばならぬ。

もちろんかつての國學からも相續すべき點は多い。あくまでも歸納的・實證的なその方法や、宣長・篤胤に見られる國家的精神と人間性とを統一せんとする思考、さては篤胤に至つて顯著なるものとなつた行的性格等々であるが、同時にまた拒否すべき點もすくなしとしない。これまで